

Title	社会的知覚研究について：偏見基礎論への準備(一)
Sub Title	On the studies of social perception, with reference to its contribution to the fundamental theory of prejudice
Author	宇野, 善康(Uno, Yoshiyasu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.535- 555
JaLC DOI	
Abstract	Some findings in the studies of social perception have a great possibility of contributing to the fundamental theory of prejudice. Because they are useful knowledges concerning psychological mechanisms inherent in the individual perception and concerning the perception of social relations rather than that of spatial relations. To call one's attention to the importance of the studies in this field, the author has described some differences between social perception and pure perception, and he has pointed out from these studies the following three features: I. considerations about the intervening constructs between a whole social perceptual stimula and the perceptual behavior toward it, by which we can estimate the each individual cognitive structure. II. considerations about the level of these studies which does not consist in explanation but in thorough description and interpretation of perceptual phenomena. III. reconsiderations about cultures, historical situations and socializations, so forth which are subtly influential to the individual perception. After reviewing some current trends of recent studies, he has pointed out that a few mechanisms found by these studies are very important mechanisms from the view point of the study of prejudice, though they were criticized as trivial from the stand point of the pure perception.
Notes	IV 社会,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0540

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会的知覚研究について

——偏見基礎論への準備(一)——

宇野善康

- I 知覚事実に於ける一側面
- II 社会的知覚研究の発想とその特徴
- III 社会的知覚研究の現状概観
- IV 結 び

この小論の目的は、近年、アメリカに於て一つの趨勢をみた社会的知覚研究が何を明らかにしようとするものであるかを、はっきりさせるところにある。そして、伝統的な知覚研究とこれとはどの点が異り、且つ研究者はその上に何をつけ加えようとしたか。而して、この側面の研究は如何に進展して来たか。筆者は、これらを略述しつつ諸種の論争にみられる誤解と混同を多少なりとも明らかにし、この研究の偏見基礎論への寄与を示唆することを目指している。

I

知覚事実に於ける一側面の問題を提起するために、先ず一つの考察態度を示して、この小論の方向をはっきりさせておきたいと思う。知覚事実については、種々の側面からの考察が可能であるが、⁽²⁾一九五七年に出版された心理学辞典⁽³⁾には、「知覚とは現前している環境の事物・事変を認知することである。例へば、そこに机があるとか、雨が降って来たとかを知ることである。」と説いている。そして、現実の刺激によって惹起された認知のみが知覚であるから、幻覚や或は環境の事物・事変の再生である記憶は知覚ではなく、且つ事物や事変を全体としてなく、分析的にその質的内容を認知するときは、これを感じと呼び便宜的に知覚との区別がなされるとある。この説明は極めて自然の如く思われるであらう。けれども刺激対象を見て、例へば、これは時計であると認める場合、その承認の基礎となる知識又は過去経験の触発的想起によって時計を時計と認めた場合の時計や、投射的ニユアンスをもった刺激対象の把握は、前述の説明によれば知覚そのものとはいえないので、右に説かれた知覚は純粹知覚を暗示している。従つて、純粹知覚というものに着目すれば、知覚とは、瞬間的な一時点における関係のみに於て、特定の刺激対象が対象そのものについてのみ開発した個人の意識ということになるであらう。而して、そこに机があるとか、雨が降って来た等々の表現は、同一文化の中に成長した一般成人にとって疑ひをさし挟む余地はないので、知覚とはこのように対象を捉えることであると聞かされても、不都合な理由はないであらう。しかし乍ら、対象を知覚したときのその内容に更にメスを加えていくと、知覚を突きとめることの容易でない

ことに気がつくのである。即ち「知覚されたもののあらわす意味の網の目を辿っていくと、現実の知覚の背後にあって、それを支えている再生された事柄やその関係又は、それらに基づいておこなわれた学習の結果および、抽象化の結果できあがっている概念などの複雑な組織にいきあたる」のである。それゆえ純粹の知覚ということを考えるとき、知覚過程の側面から、ここ迄の過程が知覚であると言及することは出来ても、内容を規定することは極めて難しい。これは既にティチナーが指摘した所であるが、例へば、目覚まし時計を見たとき、それをどのように知覚すれば純粹の知覚であるといえるか。

生後間もない乳幼児が時計に眼をやったときは、背景から浮き出ている丸いものでもいえるような或るものを認めることであらう。このとき、時計とは背景から浮き出ている丸いような或る何ものかである。孤島の未開人の目にこれが触れたとすれば、彼らはそこに、太鼓と同じような形をした硬そうな、そして二本の槍の穂先きのようなものについているチツチツと音のする異様なものを認めるであらう。彼らが認めたものは、我々が認める如き時計ではなく、見慣れない妙なものか、或は宝か、若しくは危険なものでしかないであらう。

ところで、K・ダウンカー⁽⁴⁾は、過去経験は第一にE・C・トールマンの⁽⁵⁾いう如く、椅子に対しては座り得るもの (sit-on-ability) という、そのものの本質的性質として経験されるようになる所の意味を提供するが、経験的意味そのものと、その底にある (configuration をも含めた) 知覚物との間には、完全な区別がなされるのであって、これが純粹知覚であると述べている。これは考え得ることであるが、実際には、文化的背景をもつ所の意味を剥奪した椅子以前の椅子、雨でない雨を見ることは、相当の訓練を通してのみ可能なのである。⁽⁵⁾一般社会人の場合では、今まで見たことのない且つ知識を持たぬ物を、意慾の眼差しでなく見ることが出来れば、比較的

純粹知覚に近いものを得ることが出来る。既成の観念・知識・物の見方、及び所謂内的言語を我々から剝奪すれば、我々の環周はたちどころに混沌カオスと化してしまふであらうが、事物の意味と混沌とを仲介するものを純粹知覚と考へてよいのであらう。しかし、一般人に対しては各人固有の知覚そのものから抽象させる以外に、純粹知覚を得ることは困難であり、更に純粹性を扱うための抽象は、内容を捨象した包括的な概念を提供する如く思われ
るが、これは反つて、知覚の眞の姿を加工によつて歪曲してしまふ恐れがある。そこで、このような事情からでも理解的経験としての知覚を究明することの重要性が認識されてくるのである。

しかし乍ら、理解的経験といつても未開人は時計を発見して逃げ出すか、又は恐る恐る近よつて好奇的な思惑に導かれましょう。我々は時計を見てそこに想ひ出の結晶を認めて追憶に耽り、或は数分の余裕のあることを知つて安堵し、又はあと一分！と、急ぐ気持になるが、それら諸行動の端緒を開くのが理解的経験としての知覚である。即ち、その端緒に於ける知覚の仕方と把持された知覚内容そのものに重要な意味を見出すのである。或る対象を、ただ光っているものとして捉えるか、文字盤上に長短針の位置関係を示すものとして見るかが、その後の行動と直接の関連をもつてつながっている。即ち、この知覚の仕方には、その知覚者のもつ関フレイム・オブ・レラツクス係係 枠が知覚的文脈を決定するものとして関与してくる。そして、選択の積極的な場合では、対象を或るものとして見ようとする動機づけられた欲求が知覚を特色づけている。

時計を如何なるものとして認めたかということとは、判断の問題であつて知覚以後のこととして扱うのが普通であるが、知覚そのものが一種の弁別であり、知覚内容に関しては知覚の結果と判断の結果との境界を明瞭な一線によつて劃することは不可能に近い。むしろ知覚は、有機体の成熟と経験の累積につれて思考の経済を担つて来

ており、思考の煩瑣は知覚によって軽減されて来ているので知覚は知覚判断の問題として研究さるべき特色を持っている。この点ではタイフェル (J. Tajfel 1957)⁽⁵⁾ の扱ひ方は適切と思われる。

以上に述べた要旨をリンデスマスとストラウスの表現を用いて要約すると次の如くなる。一般社会人に於ては、⁽⁶⁾
(a) 彼が何を知覚したかという個人的な報告、即ち実際に彼が見たり聞いたりしたものについての彼の観念は、推理、解釈、判断の問題を含む。換言すれば、直接知覚と呼ばれるものと、分類され命名され分析され判断される場合に生ずる知覚の意味深長な仕上げ (meaningful elaboration of perception) とは区別し難い。

(b) 知覚する場合に選択され強調されるものは、観察者の見通しや、彼の価値体系や関心・欲求などと関係している。明らかに知覚は、以前の経験、興味、関心に依存している。このことは取りもなおさず知覚が知覚者の職業、階級、年齢などの彼の社会的背景に関連しているということである。

以上、極めて常識的水準から概略的叙述を敢てしたのは、この観点を推進していく時に社会的知覚研究の広大な領域が眼前に展開し、且つ偏見基礎論への道が開けていくことに先ず注意を喚起しておきたかったからである。

(1) Bevan, W. : Perception, Evolution of a Concept Psychol. Rev. 1958. 65. 1.

(2) 心理学辞典 平凡社 一九五七年 四六二頁「知覚」の項

(3) Duncker, K. : The Influence of Past Experience upon Perceptual Properties

Amer. J. of Psychol. 1939. Vol. 52. 255—265.

(4) 木の葉は緑、と云う経験の累積から出来上った観念は知覚判断に於て如何に拭い去り難いものであるかをダウンカーは示した。同じ緑色の紙から、ロバと木の葉の形を切りとり、被験者に緑の程度を比較させると、十一名の被験者中、八名には木の葉の方がずっと緑色に見えた。相異を認めなかったものは色彩に精通している画家と、この実験を知っている心理学者と、ソフィステイケイティドな医学生のみであった。

- (15) Tajfel, H. : Value and the Perceptual Judgement of magnitude Psychol. Rev. 1957. 64. 192—204
 (16) Lindsmith A. R., A. L. Straus : Social Psychology 1956.

II

前章では主として、知覚の仕方と知覚的把持内容とに関して述べ、他の側面には触れなかったが、知覚研究の一つの正統的な特徴は物質過程としての知覚の間接的究明にある。これは精神現象を物質過程の直接の顕現とみなし、両者の因果関係を究明するのであって、自然科学的研究に不可欠の要請である客観的立場の推進、という必然的な軌道を進んでいるのである。この研究は既に、現象の記述的整理の段階を幾分か脱皮し、生理学的及び物理学的概念の援用による説明を手懸けている。ケーラーの飽和説やヘップの細胞集成体説などに見られる如き種々の知覚過程のモデルを想定して、その実験的検証の段階に進んでいる。しかるに一方、生誕後まもない社会的知覚研究の現段階は、過去に心理学が迂余曲折しつつ築き上げて来た今日の知覚学の自然科学的容姿とは歴史的洗練の上からも程遠い所にあるが、その関心はむしろ逆の方向を指している。従来の知覚学研究者が精密化のため極度に条件を統制し、被験者を静坐せしめて教示を与え、特定刺激に注意を集中させて微細な変化を追求しているとき、社会的知覚研究者は交通錯綜せる街路、災害突発、集団協同、外国人との交渉、工場内作業、マス・メディアとの接触等々に於ける各個人が何を、如何に、知覚し、その結果、如何なる行為を招いたかに関心を持つのである。これは盆栽観察が精緻な理論を呈供しつつあるとき、森林育成に関する理論が要望されてくる事情

に対比されるともいえばよいであらうか。W・デニスは一九五一年の論文の冒頭⁽¹⁾に次の如く述べている。

「知覚に関する研究文献を検討すると、この領域の研究者の多くが、暗室や何分の一かの露出時間に於て生ずるような知覚に関心を懐いて来たことを見出す。知覚される刺激は常に、幾何学図形や数字・文字・或は語であり、そして被験者は大学の学生に限られている。殆ど共通して研究される要因は、刺激に関する要因であった。過去に於て心理学者は、社会関係よりも空間関係により多くの係はり合いを持って来た。……生命を持たぬ対象に対する知覚、特にこれらの対象の意味が文化によって決定されることを疑うものはないようにみえる。同様に、或る人間についての我々の解釈も我々自身の集団成員に著しく影響される。一般市民がする世界についての知覚は、彼の教会、職業、党派、住居や新聞によって影響されることは容易に想像されるが、我々はこれらの影響の研究の労をとらないで来た。」

この陳述では、「知覚」の再定義を必要とするが、大雑把に社会的知覚研究への動機を示している。一般的にいへば、社会的知覚研究は、社会の中に於ける社会的個人の理解的経験としての知覚内容に関する研究であつて、特に知覚を支え特色づけている社会的要因関与の仕方を究明しようとするものである。

この研究は、これ迄知覚学が過去に於て自然科学的反省の下に出来る丈統制して来た諸要因を、徹底的に考察しようとしている。従つて、この研究は、従来の知覚心理学の伝統的方法のみを踏襲する限り、自然科学的洗練さに於て程遠い研究となることは言を俟たないのみならず、社会的知覚研究の意図を発揮し損うことになる。よつて、健全なる研究の可能性は、この方向に進む以前に社会科学的次元に於て、現象の綿密な整理から現象解釈の斬新性と概念図式の精巧な設定を目指してゆく方向に見渡されるのである。しかし他方、直接経験に於ける複雑な要因を考慮し乍らも、これを捨象した知覚の基礎研究にみるべきものがあり、その土台の上に今迄統制されていた諸要因を加えて考察し得る時節の到来を、我々は期待してもよいと思う。

アメリカに於て、一つの底流をなす機能的観点に立つ研究者が、近年、とに角、研究に着手し最近の趨勢を招来したが、その発想をG・マーフィー、L・ポストマンとJ・フルナー、及びG・イッヒハイザー (G. Ichheiser) のみについでみると次の如き諸点が特色として挙げられる。

一九四〇年代を費してこの研究に当ったマーフィーは、R・N・サンフォードの「空想的過程に及ぼす断食の効果」(1939, 1937)⁽²⁾なる論文を先駆的研究として挙げ、知覚は独立過程でなく欲求によって変動せられると主張した(1947)⁽³⁾。先づ彼は種々の程度の飢餓状態にある被験者がロールシャッハ・インクプロットの如き曖昧図形をどの程度、食物と関連づけて知覚するかの実験に着手した(1942)⁽⁴⁾。そして、刺激図形が曖昧な程この効果は大きいが、被験者の飢餓状態が甚しくなると、このオーティステイックな効果は薄れて現実的過程がこれにとつて代ることを見出した。次に、二つの顔を組合せた反転図形を瞬間露出するとき、図となり易い方の顔はそれ以前の学習系列に於て、報酬を受けていたものであることが分った(1942)⁽⁵⁾。その他の研究は省略するが、前者は投プロジェクション射に関するものであり、後の実験は報酬によって動機づけられた知覚の選択性に関するものである。彼の着眼点は、スイスの精神医学者オイゲン・プロイラーの「自閉性」オイクサイスムなる用語を、「願望充足に方向づけられた認知過程の体制化」(1943)⁽⁶⁾と定義している点によく窺われるが、知覚を欲求の召使オウバインであるともみなし、それとパーソナリティとの関連を重視した点にあった。

フルナーとポストマンとは、有機体の環境適合に於ける知覚の役割に着目し、認知過程の解明に重点を置いたのである。そして、知覚が知覚者の他の行動に埋め込まれている様式に関係なく、主として知覚それ自体について考察して来た者を Formalist と呼び、自らを Instrumentalist と呼んで観点の思想的背景をはっきりと打出

している。彼らは、種々の実験の結果、(1) 知覚の選択性、(2) 知覚的強調、(3) 知覚的固定、(4) 知覚の防衛等の機能を知覚者が知覚過程の間になすことを考察したが、特に、知覚的再認は刺激が見なれたものか或は、優勢な態度、価値、欲求などと一致していればいる程、速やかであること⁽⁸⁾から、知覚的再認の速さは快樂に対する原始的な願望充足の場合のみでなく、環境適合への情報を求める場合にも速やかであるといひ得るので、マーフイの「自閉性」なる用語を避け、自閉性的観点をも含めた更に広い認知に関する仮説を提出した(1949)⁽⁹⁾。そして、環境からくる刺激情報を選択し、組織化し、変形する有機体の性向或は期待を一般に、知覚的仮設 (perceptual hypotheses) と呼び、これが認知行動に於て観察される経験的諸関係を説明するための仲介構造 (intervening construct) と⁽⁷⁾ある (1951) と看做しているのであるが、更に、知覚の準備状態 (perceptual readiness) に⁽⁷⁾いて各段階の精しい分析を試み、知覚的仮設の機能を、接近性 (accessibility) なる概念によって記述している (1957)⁽¹⁰⁾。

イッヒハイザーの観点は前二者と相異り、知識知会学の概念枠を通しての独特の見解を示している。彼は、精神病学的な投射としての社会的知覚 (第一型式) と、個人間及び集団間の関係を研究する社会心理学の扱うべき社会的知覚 (第二型式) とは本質的に異ったメカニズムである点を強調した(1947, 1949)⁽¹¹⁾。前者は本来、病理学的なもので妄想症状進行の原因の一つであるが、後者は個人的にも集団的にも人間性のもつ普遍的な特徴である。而して、第一型式の知覚の誤りは、主として知覚内容にある。例へば、A自身が猜疑的であるとき、それを自認する代りにBが疑い深くて自分(A)を疑っているのだと信ずる場合で、Aは持っているが、Bは持っていない或る特徴を、誤ってBに所属しているものとして知覚する場合である。第二型式の場合では、他人が持っている特徴

についての知覚は正しいのである。偏見・イデオロギー・エスノセントリズムなどは、自分のうちにあるものが相手に投射されたものではなくて、知覚対象たる相手の人々の中に実際にあるのである。この場合の知覚の誤りは、その特徴が他の人々に固有のもので、我々自身はそれを持たないという暗黙の承認にある。イッヒハイザーは前者の投射に対し、後者のメカニズムを“Mote-Beam-Mechanism”⁽¹²⁾と名づけ、前者が主として異常心理学に属する問題であるのに対し、後者が社会心理学及び知識社会学に於て、如何に重要な位置を占めるかに対する注意を喚起した。そして、投射のメカニズムは圧倒的に優勢な精神分析学の影響下に、現在は科学的関心の焦点にあるが、“Mote-Beam-Mechanism”は概念の混同の結果、無視されて来たことを指摘し、且つ多くの実例を挙げて、概念分析を試みている。

- (1) Dennis, W.: Cultural and developmental factors in perception 1951.—in Perception. an approach to personality ed. by Ramshy & Blake.
- (2) Sanford, R. N.: The effects of abstinence from food upon imaginal processes: a preliminary exp. J Psychol. 1936. 2. 129—136.
 “ ” : The effects of abstinence from food upon imaginal processes: a further exp. J. Psychol. 1937. 2. 145—159.
- (3) Murphy, G.: Personality: a biosocial approach to origins and structure 1947. N. Y. Harper.
- (4) “ ” & Levine, R. & Chein, I.: The relation of the intensity of a need to the amount of perceptual distortion a preliminary report J. Psychol. 1942. 13. 283—293
- (5) “ ” & Proshansky, H.: The effects of reward and punishment on perception J Psychol 1942 13 295—305.
- (6) “ ” & Schafer, R.: The role of autism in a visual figureground relationship. J. exp. Psychol. 1934

- (7) Postman, L. : *Toward a general theory of cognition — in social psychology at the crossroad ed. by Rohrer & Sherif 1951. 242—272.*
- (8) Bruner, J. S., Postman L. & McGinnies E. : *Personal values as selective factors in perception J. ab soc Psychol. 1948. 48. 142—154.*
- Vanderplas, J. M. & R. B. Blake : *Selective sensitization in auditory perception J. Pers., 1949. 18. 252—266.*
- McGinnies, E. : *Personal values as determinants of word association J. ab. soc. Psychol., 1950. 45. 28—36.*
- (9) Bruner, J. S. & L. Postman : *Perception, Cognition and Behavior J. Pers. 1949. 14—31*
- (10) Bruner, J. S. : *On perceptual readiness Psychol. Rev. 1957. 64. 123—152.*
- (11) Ichneiser, G. : *Projection and the Mote-Beam-Mechanism J. ab. soc. Psychol. 1947. 42. 131—133.*
- “ : *Misunderstandings in human relations Amer. J. Sociol. 1949. 55. Sept. 2. 1—70*
- (12) マタイ伝、七章、三節、何ゆゑ、兄弟の目にさる塵 (mote) を見て、おのが目の梁木 (beam) を認めぬか。

さて、社会的知覚研究を通じ、今迄の知覚研究と異なる著しい特徴は、第一に、対象に関して知覚者がもつ好悪感情・価値観・動機・先入主・暗示的影響などの内的条件や、知覚者と対象との関連性などを一つの仲介変数として考察過程の中に導入したことである。従来の知覚研究では、これらの要因は比較的統制されており、実験室内におかれた被験者の冷静な反応から知覚体制化の根本的問題が掘り下げられたのであった。これは、いわば透明な仲介変数（或は静態的仲介変数）を発見する研究であったが、今度は社会的着色をもったいわば動態的仲介変数を凝視しているのである。ここで求むる要因は、窺い知り得るのみで操作し難く、且つ直接には計測し得ないものである。読者は仲介変数に関して、トールマンらの行動論を想起されると思うが、社会的知覚研究の底に流れている思想は、その理論の人間への適用にあつて、ネズミの行動から仲介変数を探索する仕方を、人間の行

為からではなく、人間の知覚行動から想定することに置きかえたものとみてよい。いうまでもなく、刺激と知覚反応とを仲介する社会的要因を推定し、それが関与する場合の知覚特性を予測することを以て、この研究の基本的任務とし、諸種の社会行動の基底的な解明を目指しているわけである。即ち、社会行動の触発に際し、指向的な原因となる認知構造を解明しようというのである。

第二の特徴は、扱う対象及び条件が複雑な内容をもっている点にある。従って、主観的解釈によって現象を記述せざるを得ず、用語の混乱を招き、体系的厳密性は個々の場合みられるとしても、普遍的理論への態度を看過せしめる原因が潜み勝ちである。例へば、「知覚」なる用語は知覚心理学で使われる範囲を超えて、認知・再認・判断・評価若しくは認識などと同義に扱われる。又、「dynamics」は、A・ルチンス⁽¹⁾が指摘している如く、ゲシュタルト心理学と機能的心理学では異った内容を持ち、後者の用法は含蓄に富んでいる点に於て欠陥をもっている。ゲシュタルト心理学では、motivation の力学は根本的には知覚や思考の力学と同一であり、同一の基本概念と原理が各々に適用される。そして、dynamics とは力の場に於ける緊張と圧迫であり、体系の dynamic determinants とはその体系の過程に内在する力及び他の要因である。ところで、後者の用いる dynamics, dynamic determinants, dynamic aspects の意味は、(一) かくれた若しくは無意識の傾向、(二) 精神分析的メカニズム、(三) 個人の中に於ける諸力間の弁証法的過程又は斗争、(四) 個人の内的努力と現実の要求との間の斗争等々の内容をもつ。最近、コロラド大学に於て開かれた認知理論に関するシンポジウム⁽²⁾がよき実例を示している。このような事情をもつ第二の特徴に関して、若しも客観的明確性をもって事象の因果関係をつきとめた陳述を説明と云い、推察や主観想定によって二つの事象を原因—結果の関係にあると看做して述べ

ることを解釈と云うとすれば、社会的知覚研究は先づ徹底的な記述並びに解釈を必要とする性質のものである。初期のブルナー及びポストマン流の説明は、主体的要因の複雑さのために説明とはなり得ず、その実験結果は依然として解釈に役立つに過ぎなかったわけである。これは社会心理学的研究の扱う諸要因によって、規定されてくる研究水準の宿命的要請といっても過言ではない。そして、ここに自然科学の心理学と異った社会心理学の当面する方法論上の課題がある。又、ニューカム・イッヒハイザー・キャントリル⁽³⁾・リンドスミスとストラウスらは、「知覚」の意味を前述の如き意味で用いているが、これは、知覚心理学的概念の社会学的用法といわゆるべきもので一種の混用といわなくてはならないが、心理学的方法の適用と駆使とによって、社会学的知識を再構成していく所に、社会心理学体系への道があるとすれば、この混用は社会心理学にふさわしい概念設定の前奏曲を奏でるものといわなくてはならない。

第三の特徴は、知覚者の置かれている環境条件の歴史的・文化的背景を考慮し、測定し難い vivid な諸要因を考察し直そうという所にある。即ち、特殊文化 (culture-in-particular) の構成要素である特殊の制度・習俗・社会経済的要因などと共に、言語の如き、文化一般 (culture-in-general) の影響を深く考慮しようというのである。K・レヴィンが曾って、過去と未来を現在の一点に集約環元し、ahistorical な外見に於て行動のベクトルの統一理論を打出したのに対し、これは記述的次元に再び帰ることによって、捨象された「意味」の、即ち多くの解釈の可能性をもつ諸要因の、精彩なる蘇生を図り、これを再考しようとするものである。

「最近、読むことを覚えた少女が新聞の政治欄を判読していた。そして Tammany Hall とはどんな意味かを父に尋ねた。父は、タブーについて話す時の声で、「大きくなれば判るよ」と答えた。彼女はこの大人のむら気に同意して、更に尋ねるこ

を思い止ったが、父の声の調子の中の何かが彼女を次の如く信ぜしめた。Tammany Hallは不正の情事と関係があるに相違ない。数年の間、彼女はこの政治的機関について話を聞くときは、いつも a secret nonpolitical thrill を経験した。(Schlauch, M. 1942 in Blake, R. B., Ramsey, G. V. & L. J. Moran 1950)

右の引用から知られる如く、知覚行動の十分な理解のためには、社会化の記述が決定的な重要性を持つ場合があるのである。更に又、文化人類学的観点から文化同一視の知覚に及ぼす影響が考察されて来ている(A・F・C・ウォーラス 1957)⁽⁴⁾が社会的知覚研究には広範且つ多次元的考察を要するのである。

この第三の特徴に於ける社会化とか、言語の影響に関する記述は、過去経験・暗示・学習などの心理学的概念に置き換えても或は考察の出来るものである。そして、いづれ、実験という事実検証の計量器はかりに載せ得るものである。これは、ポストマンとブルナー(1949)が知覚過程の十分な理解のためには、物理的刺激・有機体の感性的状態のみならず、中枢的状态(動因・傾向・過去学習等)の変化相に於ける考察が重要であると云ったことと関連をもつ。

以上の三つの特徴の考慮、即ち、(一) 知覚者に於ける特殊条件、(二) 知覚対象及び知覚条件の複雑性、(三) 歴史的文化的環境状況の考慮は、社会的知覚研究の水準を規定するものである。従って、知覚研究の伝統的課題と実験的手続きを超えて、社会的要因考察に新工夫がなされるとすれば、これは単に知覚メカニズムの解明に止ることなく、人間関係の内情や偏見の態度の依って来たる所以、及び行動の多くの問題や文化同一視などのメカニズム解明に十分な基礎資料を提供し得る性質のものである。又、この三つの特徴の考慮から研究水準を規定されてくる社会的知覚研究の隣接諸科学中に占める位置もはっきりしてくる。まゝに、この研究内容の主要部分が説

明でなく、記述及び解釈であり、提出された結論は比較的嚴密な条件統制下で得られた観察仮説であることを指摘した。そして、2に4を掛けると8になるという研究ではなく、2に4と推定されるものを乗すると答が8に近いか否かを検討し、そこから4と推定したものを一応4と看做す研究水準にあることを述べた。その4は、2かける2かも知れず、1プラス3か或は2プラス2か、又は2の二乗かも知れないものである。更に又、実際に実験手続きの中で乗じたものは、2だけであって統制されていない所で、別の2が知らないうちに乗ぜられていた結果かも知れないのである。一応、以上の如き反省のメスを用意した上で、この水準に於て研究を進めてゆくことの意義を考察しておきたいと思う。例へば、社会学、社会心理学、心理学、生理学をとり上げてみると、これらは夫々独自の研究次元にあるに拘らず、ある側面を辿ると縦の関連を有することがみられる。各々を一言で特徴づけることは甚だ難しいが、社会学に於ては、社会現象中より特定の問題領域が選定され、広汎且つ概括的な概念図式が設定されて、現象の諸関係が明細に記述される。これを受けて社会心理学は、特に社会的個人に着目し、社会関係に於ける心理的機能にメスを加え、現象の背後にあるある動きを実験的及び調査的方法を併用することによって更に明確化する。心理学は、自然科学的態度を以て、現象の奥にあるメカニズムを有機体の内部過程に捉えることにより、心理学的規則又は法則を打出し、且つは生理学への接近の道を拓く。純然たる自然科学である生理学は、有機体内に於けるメカニズムを客観的明確性を以て追求し、事象間の因果関係を徹底的に剔決する。これらの一連の関係は、荒地の丁寧な開墾から土壌の定性分析に到るまでの一貫した脈絡と対比されるものである。この脈絡に於て社会的知覚研究の役割が自覚されてこなくてはならない。特徴の(三)に於て、社会的な概念のあるものは心理学的概念に置換し得ると云ったのは、記述から解釈へ、そして説明への可能性の段階

を念頭に置いていったのである。然し乍ら、勿論、開墾も土壤の定性分析も共に成果への不可欠にして貴重な要因である如く、各次元に於ける認識の資料は、説明という学的目標に指向し乍らも解釈に於て既に存在理由を有することは言を俟たない。

次に、社会的知覚研究の応用面について附言しておきたい。そもそも、知覚研究の見出すメカニズムが知覚のメカニズムであるのに対し、社会的知覚研究の求めるそれは知覚そのもののメカニズムというよりは、むしろ知覚者のメカニズムなのである。従って、その応用面に於ても二者は共通領域こそ持つが、夫々独自の領域を与えられている。即ち、後者は、専ら社会的知覚事実に対する忠実な分析を目指しているにも拘らず、人間行為に対する知覚的側面からの直接的対策と批判とを切実に要求されているのである。それ故、そこに科学的偏見論研究への出発の意志を見出すのであるが、社会的知覚研究のもたらす知見は偏見の底にあるメカニズムに深く歟を人れ得る素質に富んでいる。

社会的知覚研究は、右のような背景と基盤の上に推進されるべき側面をもっていると思う。

- (1) Luchins, A. : Anevaluation of some current criticisms of Gestalt psychological work on perception Psychol. Rev. 1951. 58. 69—95.
- (2) Contemporary approaches to cognition : A symposium held at the University of Colorado 1957.
- (3) Cantril, H. : The "why" of man's experience 1950.
- (4) Wallace, A. F. C. : Mazeway disintegration ; The individual's perception of socio-cultural disorganization Human Organization 1957. 16. 2.

III

社会的知覚研究の現状 紙数の都合で詳細な論究は他の機会を俟つ外ないので、ここでは、この種の研究が如何なる範囲に亘って進められているかについて述べ、それらが如何に偏見のメカニズム解明の方向に指向しているかを素描することにする。大体、五つの流れがみられる。第一の流れは、生命を持たぬ物理的対象に対する異常知覚に関し、第二は、特に集団成員から直接影響を受けた場合の知覚のゆがみに関し、第三は、対人知覚に於ける知覚の歪について、第四は、特定の文化的背景をもつ社会集団に対する知覚のゆがみを扱い、第五は、一つの応用であって災害などの極端状況に於ける異常の知覚の研究である。

第一の研究の流れでは、**a** 生理的欲求の影響によって対象が如何に変貌して見えるか。(これについては南博に精しく紹介されているので文献は略す) **b** 対象のもつ効用とか或は、報酬という条件によって対象の感覺的属性が如何に過大に知覚されるか。大きなについては Lambert, Solomon, and Watson (1949, γ), Ashley, Harper & Runyon (1951, i), Beams, H. L. (1954, γ), Bruner & Goodman (1947, α), Bruner Postman (1948, η), Bruner & Rodrigues (1953, α), Dukas & Bevan (1952, κ), Salley & Lee (1955, ζ), 重知とくさくさ Dukas & Bevan (1952, ε), 又、部分的に否定的結果を示した実験は、Carter & Schooler (1949, μ), Klein, Schlesinger & Meister (1951, μ), この効果を示さなかったものは、Lysak, & Gilchrist (1955, ε), Bevan & Bevan (1956, θ) がある。

c 対象への指向という知覚者の条件が対象認知の速さに及ぼす影響をみたものとしては Bruner, Postman & McGinnes (1948, a), Vanderplas & Blake (1949, e), McGinnes & Bowles (1949 e), Mausner & Siegel (1950, a) があり、価値指向を対象との近親性という面から見直した実験に Howes & Solomon (1951, γ), Howes (1954, γ), Postman & Solomon (1952, γ) がみられる。

d 一般に過去経験は知覚に如何なる効果を及ぼすかについては Gottschaldt (1926, 29, λ), Braly (1933, γ), Krolik (1935, λ), Djang (1937, γ), Dunker (1939, η) があり、暗示によって過去学習の影響をみたものとして A. H. Hastorf (1950, ε) がある。第二の流れでは、自動運動を用いて単独の場合の絶体判断と集団影響下の同一人の判断とを比較し、知覚のゆがみをみたものは M. Sherif (1935, κ) 以来、幾多の研究があるが、S. E. Asch (1952) は明確な考察をなした。f 右と同様な事情の下で、長さなどの感覚の屬性判断や、審美的判断に於ける偏向を実験したものに S. E. Asch (1952), Mausner (1953, β, 54, α) があるが、集団中心と指導者中心の効果をみたものに E. Bovard (1953, α) がある。

第三の流れでは、g 或る特定の先入主を持っている知覚者が他人のパーソナリティを部分的に知らされたとき、その人の全パーソナリティを如何に統合判断する傾向をもつか。又、判断傾向の性格的特徴を追求したものに S. E. Asch (1946), A. Luchins (1948, α), Haire & Grunes (1950, π), E. Gollin (1954, ε), E. Jones (1954, ε), がある。h ある動機を知覚者が持つ場合、その動機の進展阻害に関係を持つ人に対して知覚判断は如何にゆがむかを実験的に示したものに、A. Pepitone (1950, ζ) の研究がある。i 相手に好意を持っているかによって、相手の行為が正しいとも否とも知覚され、又相手の知能・性格・美醜・野心などに対する評価がス

テレオタイプに従って著しく変形することを示したものに M. Zillig (1928, e) や G. Razran (1959, a) の実験がある。イツヒハイザー (1929, c) は、データを示していないが、他人の性質を誤って知覚する場合の種々のタイプを提唱している。例へば、失業の如き時世的要因がその人のパーソナリティによるものであると看做され易いとか、個人の行動の一部分について真実であることがその人の全体の性質と受けとられたり、或は最初にある特徴を印象づけると、それと異った他の特徴は受けつけない傾向がある等等から生ずる人間関係の誤解を豊富に述べている。又、ソシオメトリー研究に於ては、集団成員間の好き嫌いの選択判断やその他の認知をソシオメトリック知覚と呼んで対人知覚を重要視して来ている。更に、社会学に於ける社会的役割研究では、自己及び相手が夫々分担している社会的役割を、各人が如何に知覚するかによって、行為が如何なる形態をとるかを究明するが、この役割知覚の問題は社会心理学の課題として脚光を浴びつつある。これは対人関係に於ける社会的認識研究というべきもので、この概念は、かつて「態度」なる概念が社会心理学に於ける基調的なものであったと等しく、社会心理学的認識研究に不可欠のものである。第四の流れは、直接、社会的偏見研究につながるものでここでは取上げない。最後に挙げた流れは、まだ試論的なもので、実験室の結果から外挿した仮説的解釈と、文化人類学的立場からの調査的研究である。これには、Fritz & Marks (1954, d), A. F. C. Wallace (1957, o), F. P. Kilpatrick (1957, o) などが散見せられる。

註 この章の中で列挙した研究者名の次のカッコ内のギリシア文字は、夫々次の文献掲載紙を示す。

a : J. ab. soc. Psychol. c : Amer. J. Psychol.

b : J. appl. Psychol. e : Arch. Psychol.

社会的知覚研究について

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| γ : J. exp. Psychol. | λ : Psychol. Forsch. |
| δ : J. gen. Psychol. | μ : Psychol. Rev. |
| ε : J. Pers. | ο : Hum. Organization. |
| ζ : J. Psychol. | π : Hum. Rel. |
| η : J. soc. Psychol. | φ : Amer. J. Sociology |
| θ : J. Soc. Issues. | ω : Zt. Schr. f. Psychol. |
- 近' Asch, S. E. : Social Psychology 1952.

IV

以上の諸研究の趨勢を概観するとき、社会的知覚研究のもたらす知見が、社会心理学の基底的な重要課題に如何に深い関連をもち、かつ現象分析の鋭利な解剖刀となり得ることを推察されたと思う。個が他と接するとき、個が集団の中に介在するとき、その相互作用及び相互影響は、いうまでもなく社会的知覚の関門を通過せずしては生じ得ないのである。ここに、外界からのインフォメーション受容の分水嶺、及び行動分岐の原因の一つがあるものであり、行動触発を左右する指揮者がかくされているのである。社会的知覚研究の根本的な意義は、恰も物理的対象に対する多くの行為がその対象の知覚によって規制されている如く、社会行動の明からさまざまな形態は、社会環境の知覚に基づいて操従されている所にある。若しも、かような密接な関係が知覚と行為との間にあるとすれば、不適応な社会行動は社会的状況の不正確な、或は歪んだ知覚から生ずるものであると推論できる。この

観点を推し進めていけば、人間関係の矛盾や偏見の態度や行動の多くの問題は、ある程度、社会的知覚の歪みの結果であると看做されるのである。従って、知覚過程に於ける歪みの決定要因を究めることは、本質的な重要性をもってくるのである。この小論では、社会的知覚を主要テーマとする諸研究によって社会的個人は如何に知覚し如何に判断するかの側面についてのメカニズムが考察されたことを示した。しかし、これらのメカニズムのあるものは、知覚過程についてみると大してメカニズムといい得る程のものでないという批判⁽¹⁾に屢々遭遇した。けれども筆者は、それが純粹の知覚過程に於てではなく、潜在意識的な注意傾向とか判断傾向や、知覚印象をまざまざとしたものにして附随的感情なども含めた社会的認識過程に於けるメカニズムであることを述べ、そして、これが偏見の態度に伏在する重要なメカニズムであることを示唆して来た。

これらは知覚という瞬間的又は短時間的な時相に於て見出されるメカニズムであるが、知覚されたものが、長時間の経過後、如何に歪んでゆくか、即ち将来、判断の素材となるものが不知不識のうちに如何に変形してゆくかのメカニズムが、次に考察されるべきであらう。偏見基礎論への準備⁽²⁾は、この点より展開される。

(1) これらの批判は次の文献にみられるものを指す。

Pastore, N. : Need as a determinant of perception *J. Psychol.* 1949. 28. 457—476.

Luchins, A. : An evaluation of some current criticisms of Gestalt psychological work on perception *Psychol. Rev.* 1951.

Howie : Perceptual defense *Psychol. Rev.* 1952. 59. 308—315.

Prentice, W. C. H. : Functionalism in perception *Psycho. Rev.* 1956. 63. 29—38.